



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十二号 (一日発行)
平成七年九月一日

北海の古平風土物語 一三八

古平名所「偕楽園」

まぼろしの古平鯉公園 高橋源 五口

(続 き)

昭和三、四年ころから、古平川の水を上流でせき止めて、灌漑溝(かんがいこう)に水を引くようになったが、それから川水が少なくなり、夏の泳ぎ場もなくなつた。また、遡上する川魚もすつかり減つてしまつた。

当時は、ヤマメ一尾が五銭から七銭、アユは一尾七銭から十銭であつた。

その後、昭和四十年前後からアユの稚魚が放流されるようになり、わずかに釣り人を楽しませているが、往時を思えば寂しい限りである。

まぼろしの

《十口平鯉公園》

大正の中ごろから、当時、鯉場の大網元であり、古平の一大資産家であつた山口金治氏が所有していた畑町(現・栄町)

に公園を造成し「偕楽園」と名づけたが、ここでは「まぼろしの古平鯉公園」としておく。

出来たころから古平の人たちは『①の公園』とか『古平公園』とかいって親しみ、誇りにもしていたのである。

当時所有していた畑の面積は三万平方メートル余り(約三ヘクタール)約三町歩)といわれ公園の広さは、その内の約二万平方メートルと聞いている。広大なものであつた。

この公園は四季折々の景色が良く、町の人たちが憩い、町外から見物に来る人も多く、園内は春・夏・秋といつも賑わっていたことを思い出す。古平の鯉漁業が盛んであつた時代を物語る象徴でもあつたのである。

山口金治さんは大変庭の好きな人であつたと聞いている。本州の庭師を呼んで、大正六、七

年ころから本格的に造園に着手したのである。その補助的な仕事に町内の人を雇入れ、いつも十数人の一団が賑やかに働いていたことを覚えていた。私の家のすぐ前でもあつたので、ときどき遊びに行つては見ていた。大きな池を掘り、築山を造つていたが、土が不足すると家の裏から運んでいた。これは冬になると馬そりでやつていた。

また、海岸から姿かたちの良い大きな石や、玉石などを集めて置いては冬に馬そりで引いていた。大きな石は二頭引き、四頭引き、時には六頭引きで運んでいたが大掛かりの運搬作業でなかなか威勢がよく、浜町から畑町にかけて賑やかなものであつた。

陸地は難所

ばかり(2)

ようやくにしてトママナイ(苦前)という少し平地のところに出たので、こ

で木を拾つて湯を沸かし、お茶をいれて昼食を食べた。そこから谷へ下り、膝ぐら

いもある谷川をしぼらく歩いて、また山に登つた。チャレベヨナイという所に下り、そこからは波打ち際を歩いた。ソウヤを出発してから十七日

つた。こうして三、四年かけて数百個もの石が運び込まれ公園内に配置されていた。樹木も沢山植えられたが、その種類も数も驚くばかりであつた。当時、家の裏山からも、植えてから十五年から二十年程もたつたようなトド松を、百本近くも公園に移植したように思う。

こうしてトド松・水松・杉・黒松・赤松・五葉松・イチヨウなどのほか、梅・桜・桃などの大きな株も植え込まれた。

その他、本州方面からも取り寄せた、珍しい四季折々に咲き誇る花木類や、赤や緑の紅葉類もあつた。また、芝生も作られた。

目の九月九日、ようやくルルモッペ(元の留萌町)という所に着き、ここに泊ることにした。

翌日、マシケ場所のホロトマリに着いたが、海上が大変荒れていた。ここにしぼらく滞在することになつた。ここは峠の通行が難しく、舟でなければ通行ができない場所であつた。ここは風が強く、聞くところでは、つい先日ルルモッ

からの舟が遭難したという。

アイヌの《ことわざ》
《世間ばなし集》から

わが茅澗炭鉱には外国からの技術者が何人か来ていたが、エドワード・パレーという英国人がいた。もともと炭鉱の仕事が専門なので、どこへでも行って炭脈を見つけることができればそれは大きな利益になる。茅澗では、いま川の上流を試掘している時なので、その付近を見ておくことも大事なことである。また彼は、古平湾が船の出入りに安全なことから、茅澗炭鉱の石炭を古平地方に運搬することも考えていた。折があったら古平に行つて見たいと言っていたが、仕事の都合でなかなか実現しなかつた。それが今回、山越えをするという話だったので、年末から歳初めの休みを利用して彼も参加することになった。

私もたまたま札幌へ行かなければならない仕事があったので、これに同行することにした。ほかにも同行者がいて、それに人夫数人を加え総勢十人余りで出発することになった。さてこの山越えは、かねてから聞いていたように僅か六里に余る里数だと考えていたので、たとえどれほど山が険しいとい

明治13年 泊村茅沼炭坑から

古平行の記 (2)

つても大したことはなからう。山中の炭焼き小屋にでも一泊すれば、翌日は古平の町に着くだろうと一同はみんなそう思っていた。

このようなことから特別に準備することもなく、休暇のくるのを待っていたのであった。ところが、あいにくのこと

二十八日ころになると天候が荒れて出発を延ばしていたところ、正月の三日、日和に恵まれついにこの日決行することになった。

前の晩に用意をしておき、夜の明けのを待つて茅澗村を出発した。

パレーをはじめ、炭鉱の職員、人足請負人の三田、それに人夫数人が加つた。

茅澗村を出たのは八時ころであつたらうか。空はすつかり晴れ渡つて日光が輝き、一同は勇んで玉川に沿つて本沢の方に歩き出したのである。本沢の辺りまでは、まだ炭坑の試掘坑があつて道路もほぼついているので、雪道にもそれほど苦労をしないで歩くことができた。

ここから川沿いに、その源流に向かつて住むのである。

古平場所と岡田家 (14)

一、練つぶし

一、御用状継立(手紙を運ぶ) 普通は濁酒二盃と飯二盃を与えるが、時刻を定めて継ぎ立てをするときは濁酒二盃と飯三盃を与える。

一、役人が通行の時 見送り一人につき清酒一盃と濁酒二盃、また役蝦夷二人が陣羽織を着て出迎えをするが、そのときは清酒一盃と濁酒二盃を与える。

一、男蝦夷が練運びをする。屋に濁酒を一盃ずつ、夕方仕事が終わつてからその日模様により清酒一盃と濁酒一盃を与える。

一、かま焚き 八分胴で十個仕上げて一人前とする。仕事のあと清酒一盃、濁酒二盃を与える。

一、練割き 雇蝦夷濁酒二盃与える。

一、生数の子・白子 運上家に引き揚げたハマナカ(浜町)からメメタレ(港町)までの生数の子と白子はそれぞれ記帳しておき、夏中の分を勘定し、生数の子一樽について清酒一盃、濁酒三盃を与える。白子は二樽につき数の子一樽分とする。

一、外割り(ほかわり) 運上家に外割りを納めたときは記帳しておき、あとで清酒で払い、別に祝い分として濁酒を与える。

一、夏漁の始まり 土用の入りの二十五日前から鮑のヤスおろし、海鼠引きが始まる。土用の入りからは夜に引く。

一、阿巳繩(あみなわ) 二十五尋は貸しつける。

一、女蝦夷雇い上りの時 上酒二盃と濁酒二盃、木綿五尺、カンナ十五把、マキリ一丁、〇一本を与える。

一、男蝦夷雇い上りの時(仕事の終わつた時) 上酒二盃と濁酒二盃、ほかにカンナ(縫糸)十五把、たばこ二把、マキリ(小刀)二丁、〇一本(〇の文字が読みとれない)を与える。

一、女蝦夷雇い上りの時 上酒二盃と濁酒二盃、木綿五尺、カンナ十五把、マキリ一丁、〇一本を与える。

一、夏漁の始まり 土用の入りの二十五日前から鮑のヤスおろし、海鼠引きが始まる。土用の入りからは夜に引く。

一、阿巳繩(あみなわ) 二十五尋は貸しつける。

一、女蝦夷雇い上りの時 上酒二盃と濁酒二盃、木綿五尺、カンナ十五把、マキリ一丁、〇一本を与える。

遙かなる故郷の思い出

鯨漁の歩方(ぶかた)の話

橘 義春

127

小学校高等科二年のときに水産業」という科目が新設されて、水戸の水産学校を卒業した千葉力二先生が担当することになった。今までは高等二年になると英語の科目があつて、みんなそれを楽しみにしていた。

ところがある日、竹林源次郎校長が朝礼の時間に突然、「今は英語の科目を廃止して、水産業にする」といわれ、クラスのみんなの落胆は大きかった。将来、全員が漁師をやるわけでもないのに、なぜ水産業を学ばなければならぬのかと、千葉先生をまるで貧乏神のように恨んだりしたものだつた。

目の作り方から綱の結び方まで習つたが、まさかそのようなことが、後になって自分の仕事に生かされることにならうとは夢にも思わなかつた。

樺太(サハリン)から復員してきて、翌年の昭和二十二年三月の初めの頃だつた。親戚で鯨漁の網元をしている岡竹本漁場の若親方である勝治さんから、

鯨漁からすけそ漁の時代へ
鯨に代わつて 景気の
良くなつたすけそ漁 (1)

古平周辺ではまだまだ豊漁が続いていた大正の末頃、それまで鯨景気に沸いていた寿都から岩内方面では早くも凶漁に見舞われていた。

大正十二年、古平では三万二千石の漁獲があつたが岩内では漁獲皆無(岩内町史)であり、古平・美国から或る一商店が十万尾の買鯨をしたとある。

しかし岩内では、この頃すでに発動機船四十数隻と川崎船ですけそ漁を始めていて、相当の

「どんだ、オレのどこの鯨の歩方に入らねエが？」と、誘われた。魚釣りは趣味として好きであつたが、漁師はやつたことがない。

「俺に—— 鯨場の漁師がやるべが……」
「なんも心配ねエてば。おめエ軍隊のメシを三年も食つて来たんだベエ。それだらなんでもできるベサ」ときたもんだ。

なんだかうまくおだてられ、すつかりその気になつて祖父に「俺に鯨場の歩方に入れと、勝治から誘われたが、どんだべ」「ホー、おめエ漁師やる気か。」

水揚げがあつた。
大正六年十一月の小樽新聞に漁師の談話が載つている。

助宗漁業の始まりは、なんといつてもこれは岩内町に求めなくてはならない。

従つて岩内町の助宗漁業の変遷史は、また、本道助宗漁業の変遷史でもあろう。

今やちやうど漁期最中、当業者の興味深い炉辺夜話を綴つてみよう。(岩内支局・0生)

体の方はもう大丈夫だベナ」「うん、体はピンピンだ」「したらやってみれ。でもなア鯨場はゆるぐねエぞ」とおどかさされたが、これで話は決まつた。

祖父は若い頃から、竹本漁場の船頭や帳場を長い間やつたことがあり、私が子供の頃は、歩方の親方を何年もやつたことのあるベテラン漁師であつた。

だが、祖父の言つた「鯨場は楽じゃない」のひとことが気になり、港町にいる同級生で親友の堀勝治君を訪ね、それとなく漁師についての意見を聞いてみた。

彼は漁師には興味があつたようだが、戦争中は軍艦・武蔵の乗組員で、乗艦が敵の飛行機の集中攻撃を受けて沈没した。しかし彼は運よく助かつたが、頭と腕に大けがをし、腕が何か所か折れ、それで力仕事は無理なので漁師をあきらめたのだという。

「君なら大丈夫」という励ましの言葉で、なんだか俺にもやれそうな気がしてきた。



今年 古平小学校
開校百二十周年
六十周年の頃の思ひ出し

(二) 沢江江村に
金鷄少年団

竹内コト

(一) ピアノに
目をみはる

昭和十年——この年はたしか私が高等科一年になったときです。小学校の六十周年記念が行われました。

学校の中はきれいに飾られ、校門の前には立派なアーチも建てられて、町中がこの記念行事を祝っていました。

全校の児童・生徒や先生方、それに町内の有志や団体が参加して町内の旗行列をしました。

校内には児童・生徒の図画・習字・工作・手芸・調査した図表などの作品のほか、町内からも書画・骨董品や盆栽などがたくさん展示されて大変な賑いでした。

そんな中で、子供たちがびっくりすることがありました。なにしろ汽車も見ることがないというのに、絵でしか見ることもなかったピアノが学校にきたのです。今では一般の家庭でも見ることができますが、その頃は初めて見る楽器でした。顔が映るほどのピカピカのピアノに、

おそろおそろそつと触つてみたりして、それはもう大変な喜びようで、唱歌(音楽の時間を昔はこういつていました)の時間になるとみんなうきうきしていたものです。

この頃、沢江村に『金鷄(きんし)少年団』というのが結成されて、小学生の多くがこれに入っているいろいろな活動をしていました。

ました。支那事変(のち太平洋戦争)が始まると、戦地の兵隊さんへの慰問文などを書いたりしていました。少年団のリーダーであった竹浪さんには沢江の人たちはみんな協力をし、少年団の活動を援助しました。

「今日日はこんな日」
古平町開基百年を祝う

先人の苦闘を思い
新しい発展の時代へ

[昭和43年]

明治二年(一八六九)、それまで蝦夷地と呼ばれていた北の未開の地が、北海道と名づけられ、北海道開拓使によって治められることになった。

この古平に和人が住むようになったのはいつ頃かはつきりしないが、八百年ほど前、奥州の藤原氏が滅亡したときにその家臣が逃れて来て、この古平にも住むようになったとされている。

そして、それまで古平と呼ばれていた区域が『古平郡』となり、当時、すでに鯨漁が盛んであったこの地に北海道開拓使古平出張所がおかれることになった。

古平が歴史に現れてくるのは有名な関ヶ原の合戦の後からだが、近江国(滋賀県)八幡の商人であった岡田家が場所請負人として漁場を開いたのが、古平

それ以来、鯨の千石場所として繁栄を続け、明治元年には戸数二百十戸、人口二千二百人であった。当時の蝦夷地の総人口は僅かに六万人といわれていたから、古平はすでに蝦夷地の有数の集落であったことがわかる。

それから数えて昭和四十三年(一九六八)で百年になる。

として漁場を開いたのが、古平

記念式には古平町五十年以上の在住者も一家から一人招待されたが、その数は七百十五人を数えた。